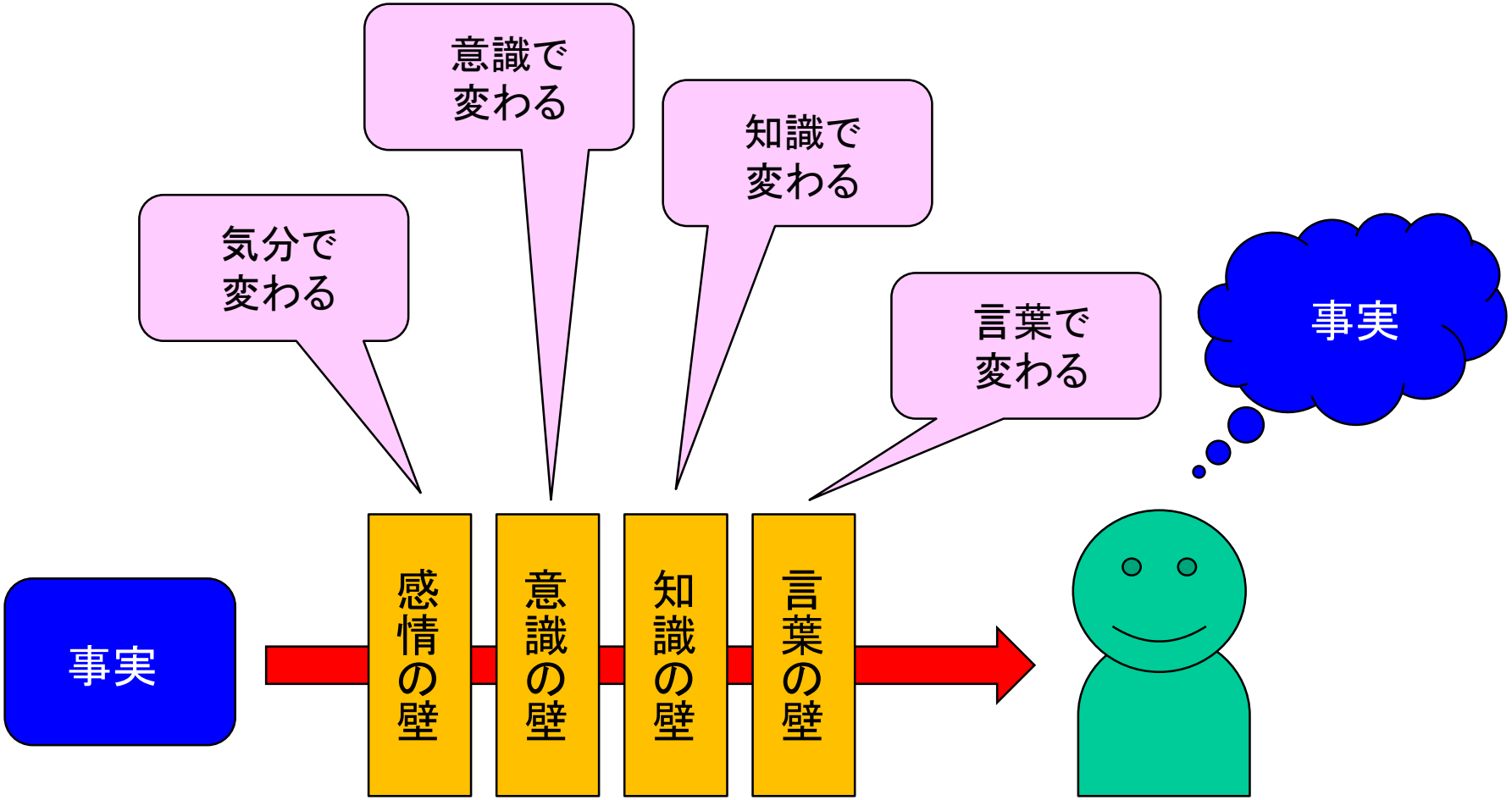
ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2019年5月
理系頭の資産運用術
（⑥ 真実と事実）

ネクストライフ・コンサルティング
〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com
ピカイチ生活経営塾　検索

ピカイチ先生

事実とは？



この場合、何が事実なのか？（1/2）

「アメリカでは昨年、七面鳥の肉の売り上げが25%増加しました。
　これはダイエット食品や健康食品への関心が高まっていることによるものです。
　つまり七面鳥の肉は『低カロリー食品』だと考えられているわけです」

「フィッツラーさん、私はあなたに『白い帽子』をかぶるように頼んだはずです。
　25%増加したことは事実ですが、それ以外はあなたの意見ですね」

「そうではありません。
　市場調査によれば、消費者が七面鳥の肉を購入する理由は、コレステロール値が低いと考えているから、という結果が明らかに報告されています」

「ということは、あなたは2つの事実を捉えていることになりますね。
　事実その1、昨年、七面鳥の肉の売り上げが25%増加したこと。
　事実その2、市場調査では、コレステロール値が低いという理由で、消費者が七面鳥の肉を購入するという報告があること」

『会議が変わる6つの帽子』（2003.01.30　エドワード・デ・ボーノ）より

この場合、何が事実なのか？（2/2）

「女性の喫煙者数が増加傾向にあります」

「それは事実ではありません」

「事実です。私はこのような資料をもっています」

「あなたの示した資料の数値は、最近3年間に女性の喫煙者数が以前の年に比べて増加したことを示しています。それは傾向といえるのでしょうか？」

「傾向だといえます。でも、それはあくまで私の見解です。私の考えでは、傾向とは何かが起こって、それが続いていることを示すものだと思います。

その資料の数値は事実です。おそらく、（中略）。傾向というのは、最初のうちは多くの機会を提供してくれますが、次第にその数が減っていくものです」

「私は、ただ数値が増加したことで、『傾向』という言葉を使っただけです」

「それは『傾向』という言葉の正しい使い方かもしれませんが、“何かが進行しているプロセス”であることを示す別の使い方もあります。

それで、純粋に白い帽子の考え方を使って、次のように言う方がずっとよいわけです。『最近3年間は、女性の喫煙者数が増加しています』。

そのあとで、私たちはそれがどんな意味があって、どんな原因によるものかを議論することができるのです」

『会議が変わる6つの帽子』（2003.01.30　エドワード・デ・ボーノ）より

事実はどれだけ真実に近いのか？

「将来の見込み利益を当てこんで投資する企業は大抵、憂き目を見ることになる」（一方、そのような見込み投資をして成功を収めている企業も少数ながらあることは事実だ）

「物価が下がると、売り上げは上昇する傾向にある」（住宅の価格が上がると、投機目的やインフレ懸念、あるいは時流に乗り遅れたくないといった理由から、現実にはその売り上げが伸びるかもしれない）

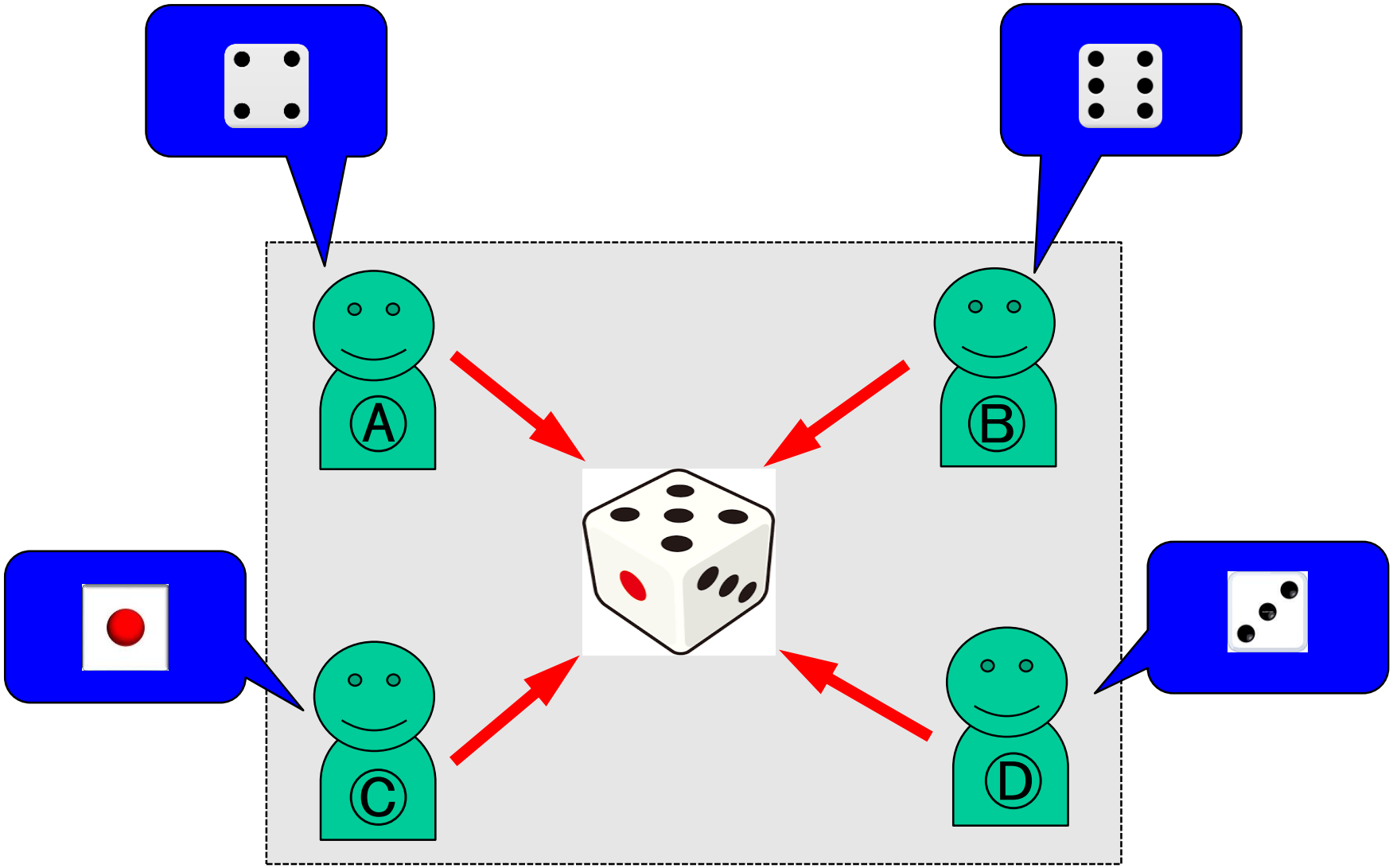
「懸命に働けば、あなたは人生で成功するだろう」（働きすぎた人の多くは、必ずしも成功しているとは限らない）

事実の「見込み」を段階表示すると、次のようになるだろう。

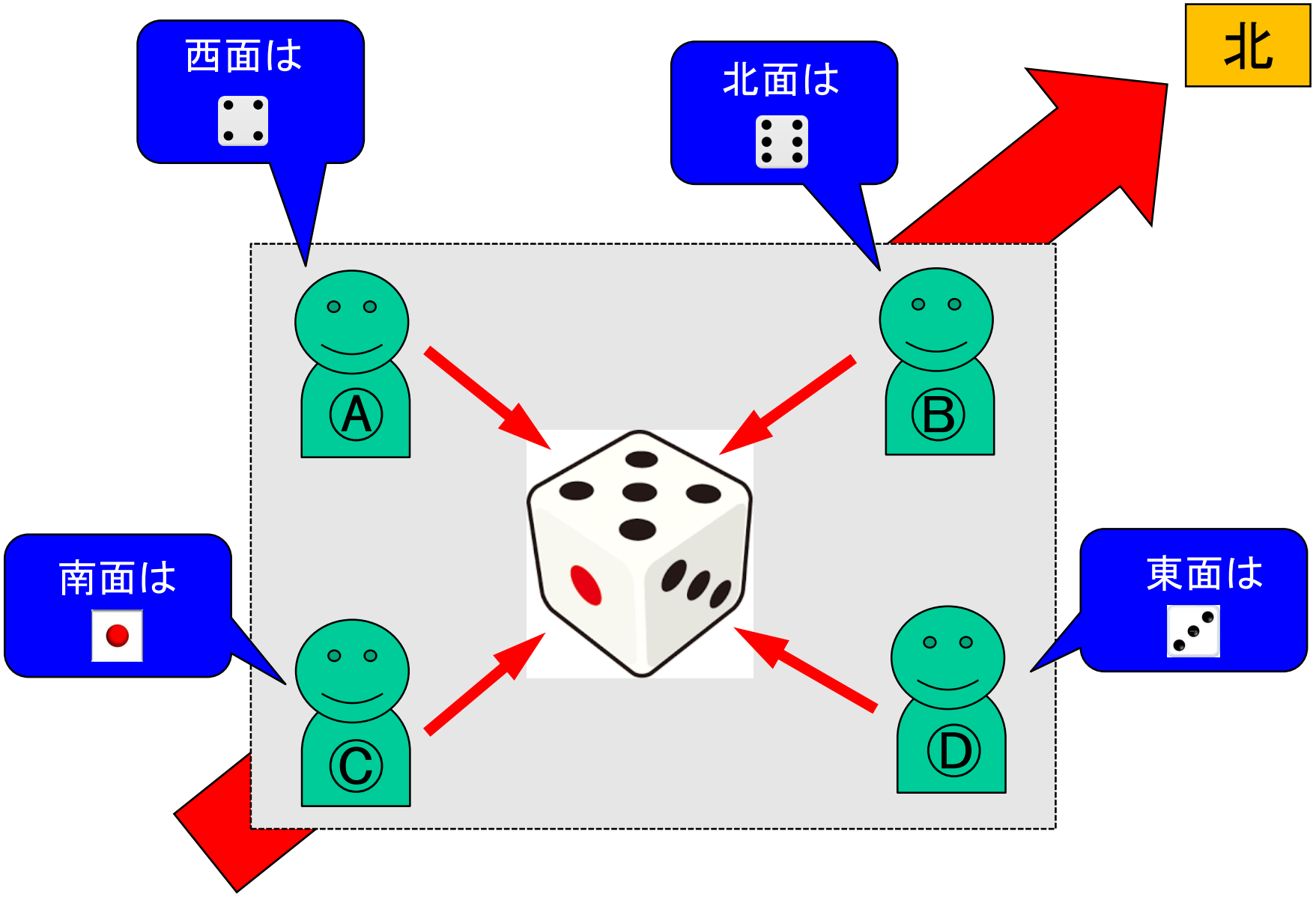
・常に真実 （always true）
・ふつうは真実 （usually true）
・一般に真実 （generally true）
・大抵 （by and large）
・ほぼ（２回に１度以上は）（more often than not）
・しばしば （often）
・ときどき真実 （sometimes true）
・たまには真実 （occasionally happen）
・真実のときもある （be known to happen）
・決して真実でない （never true）
・真実ではありえない（矛盾している）（cannot be true）

『会議が変わる6つの帽子』（2003.01.30 エドワード・デ・ボーノ）より

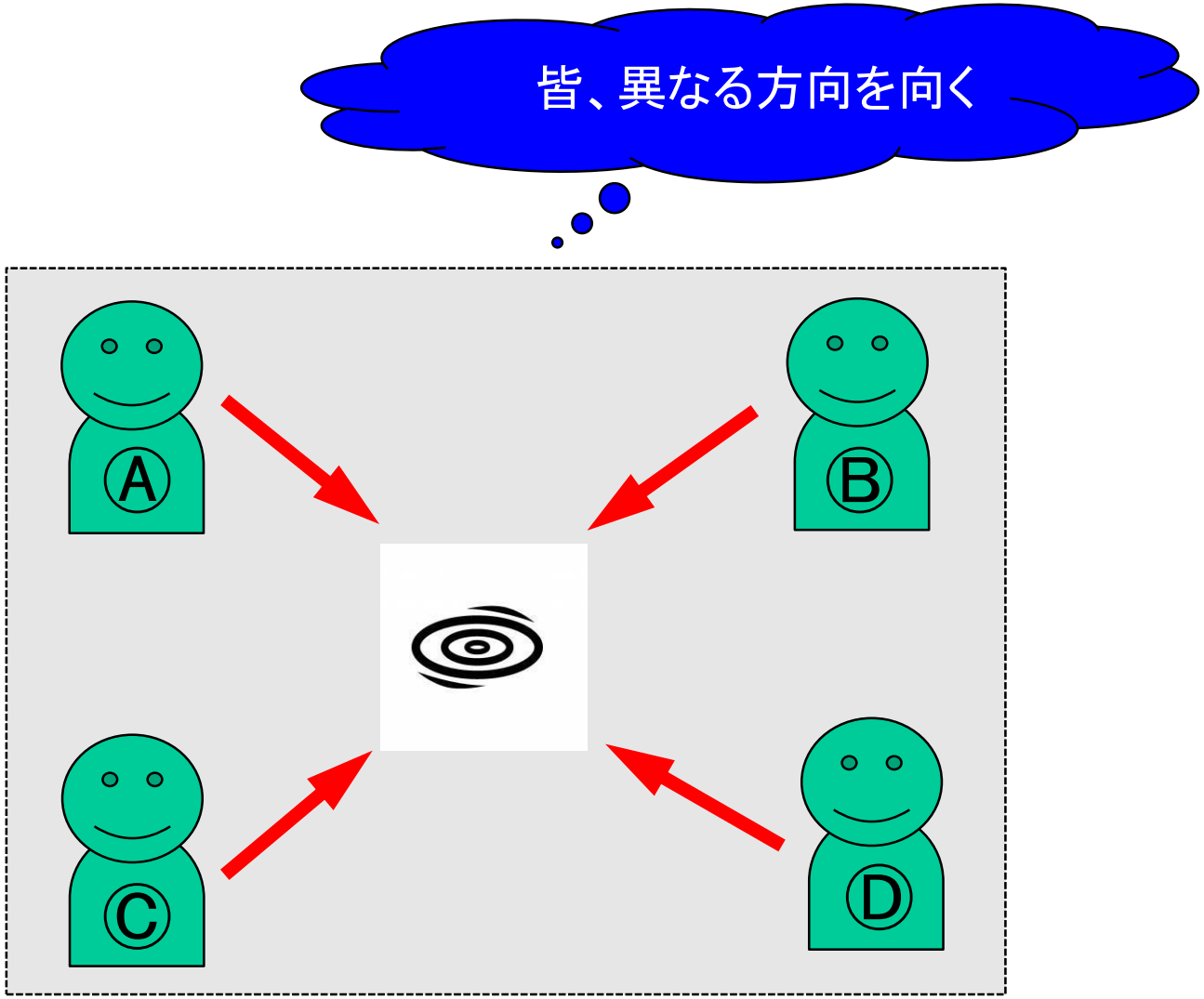
事実のあれこれ



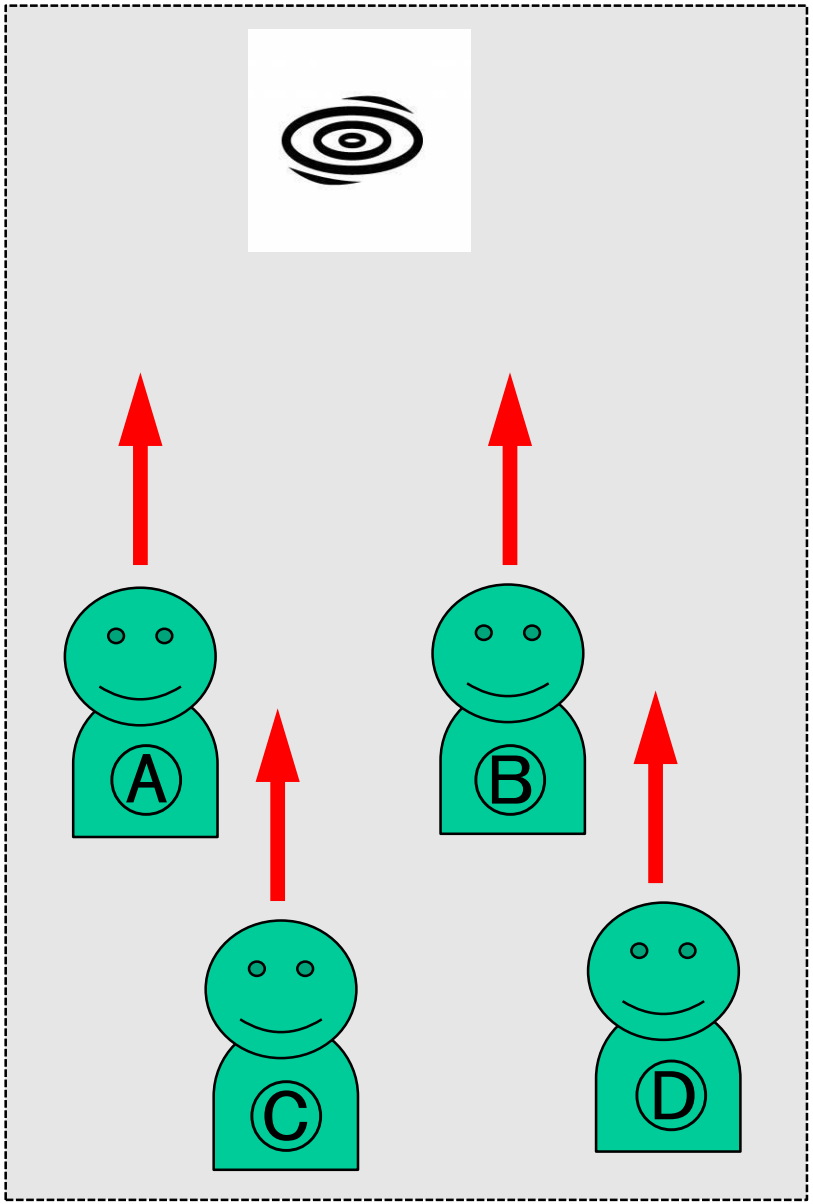
基準をつくる



輪の中に、石を投げると



遠くに、石を投げると



皆、同じ方向を向く

状況分析は「べきだ」ではなく「はずだ」の視点で行う

文系の人の中には、状況を分析するときに「べきだ」という発想を持ち込む人がたくさんいます。「べきだ」というのは、その人の価値判断が入っていますので、状況を正しく認識できなくなります。

理系の人は、状況を分析するときには「はずだ」という論理を用います。まず、「理論に基づくとこうなるはずだ」と見て、検証、分析し、理論が当てはまらない場合には、さらに分析して理論を修正したりします。

「べきだ」と見ている人は、自分の理論と現実が違っているときに、現実のほうを否定して自分の理論を守ろうとする傾向があります。（中略）そうするとファクトを正しく見られなくなっていきます。歴史を振り返るときも、「べきだ」で歴史を見ていく、歴史のファクトを見誤ります。

もちろん、意見を述べるときに「べきだ」というのはかまいません。私も政策提言をするときには「べきだ」を使います。しかし、ファクトを分析するときに「べきだ」を持ち込んでしまうと、真相が見えなくなります。

『戦後経済史は嘘ばかり』（2016.01.29　高橋 洋一）より